Japanese Association for Religious Studies



る。このオーロビンド・アシュラムの学校と比べると、日本の仏教教団の学校教育は仏教の理念を充分に生かし切れていない嫌いがある。

第三発表者の宮井里佳氏は『金蔵論』研究の立場から、「中国仏教の唱導」を発表した。仏教教育は「法会」の場で一般の人々に行われてきた。法会の中に「唱導」という説教形式があり、人々に仏法をわかりやすく説いて教え導いた。道紀撰の『金蔵論』は、因縁譚をテーマごとに収録した仏教の要文集であり、説法の種本として用いられた。ここに説かれる因果応報とは、仏法を迫害すれば悪果が顕れ、仏法を護持すれば、善果が顕れるということである。善因善果・悪因悪果の物語は、善行への志向を高め、社会の安定のために有益であろう。しかしながら、説かれる善果が世俗的な価値観や地位と結びつくことは、既存の社会の悪い意味での維持につながる。また、善悪が仏教を信ずるか否かの観点で説かれることは、仏教護持のためのものであったことを意味するであろう。

第四発表者の岩瀬真寿美氏は教育学の立場から、「日本の仏教教育」というテーマで仏教教育の人間形成的意義を考察した。インドの大乗仏教で衆生が如来になるべき因として如来蔵が説かれた。この思想は仏性に繋がるものであり、宗教的情操教育に生かすことができる。人格の完成（覚者の完成）を目的とする点で仏教と教育には共通性があるものの、（道徳）教育には限界があり、宗教に負う面がある。宗教的情操教育は宗教の教化的性格を強調するものではなく慈愛的なものであり、人間をそのまま肯定するものではなく如来蔵（仏性）を肯定する教育である。このように仏教における宗教的情操教育は如来蔵思想による人間形成の可能性を探ることができる。

今回のパネルでは、フロアから多くの質問があり、発表者とフロアとの間で活発に議論できた。そのため、教育の現代的な意義だけでなく、仏教及びヒンドゥー教の思想を宗教教育に生かす今後の可能性を一緒に考えることができたことは有意義であった。

## 日本人の宗教性を問う
### ――欧・米・韓・日の宗教事情を通して――

代表者・司会　藤　能成
コメンテータ　原田哲了

### 韓国の宗教事情と日本人の宗教性

藤　能成

日本の宗教学・社会学の研究者が「日本は非宗教的社会である」と見ている通り、日本人の生き方は、一般に世俗化されており、物質主義にもとづく自己中心的、欲望追求的生き方をする人が多く、宗教に対する社会的評価も低い。多くの人々が、非宗教的、物質主義的生き方により、孤独・虚無感・死への恐怖等の精神的苦悩に苛まれている現実がある。しかし一方で、日本を訪れる韓国や西欧の人々や研究者から、その宗教性を高



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



く評価されている事実がある。何故このような、相反する評価が生まれるのだろうか。

発表者は、日本人の宗教性の有無を論ずる上で「宗教性」について「物質的次元に生きる人間が、〈祈り・瞑想（または浄土真宗における念仏・信心・聴聞の生活）〉を通して見えない精神的次元と繋がることによって、自己中心的欲望追求の生き方を離れ、無私の想いで自身の役割・仕事に励み、人生の意味や目的を見出し、物質主義に起因するところの孤独、不安、虚無感、死への恐怖等の精神的苦悩を克服して行く生き方」と定義したい。

石井研士は、諸統計の結果から、日本は世界の中でも「宗教性の低い国」に分類され、宗教団体への帰属意識は他国と比較して著しく低く、宗教団体への信頼度も低く、また自覚的な宗教意識や宗教行動に関しても、回答率が低いことを指摘する。そしてそれが、日本人の「非宗教性」とともに「宗教に対する曖昧な態度」を現すものだとする。

藤田みさおは「死への恐怖度」の調査・分析を通して、日本人は、東洋圏・西欧圏の国々の中で「死への恐怖度」がもっとも高いことを指摘する。死後の転生を信じる東洋圏の国は、概して西欧圏の国より死への恐怖度が低い。日本人が、東洋圏でありながら西欧圏より高い恐怖度を示す理由として、特定の宗教を信じず、来世を信じない傾向を挙げる。

韓国の宗教人口は総人口の約半分であり、仏教、改新教（プロテスタント）、天主教（カトリック）が三大宗教である。一九八四年の宗教意識調査（韓国ギャロップ調査研究所）によれば、韓国人の宗教への帰属意識や、宗教や聖職者への社会的評価は高い。また、韓国人一般に現世中心的意識が高い傾向があり、特に仏教徒は世俗的・迷信的傾向が強い。宗教性がありながら、世俗化されているという、矛盾的構造が見える。

最後に、韓国との比較から見えてくる、日本人の宗教性について指摘したい。韓国人は日本人に較べて、宗教意識や、宗教団体への帰属意識、聖職者への社会的評価が高く、日本よりも宗教的な社会である。しかし一方で、仏教と改新教の間には社会的摩擦が見られる。また世俗的傾向も強く「真の意味での宗教性」が高いとは言い難い。これは仏教、改新教などの「各宗教が広まっていても、それらの教義の本質が必ずしも定着していない」、つまり「宗教の世俗化」の現われであろう。

第二次大戦後、日本の教育は、宗教性を排除し、科学主義・物質主義を基盤とした心理学により進められたため、人々は「科学こそが真実」と考えるようになり、宗教離れと世俗化が進んだ。しかし一方で「日本人の宗教性」は、韓国人や西欧人から高く評価されており、秩序意識、謙虚さ、勤勉さ、誠実さ等、宗教意識が基盤となるような人格を保っている面がある。これは、日本の長い伝統における集団的秩序意識を重んずる文化と、先人達の宗教的精神生活が積み重ねてきた文化の遺産によるものであろう。日本人の生活の中に巧みに組み込まれた仏教・神道等を基盤とする宗教的精神文化が、現代日本人の無自覚的「宗教性」を支えている。しかし先人達の遺産としての宗教性は、現代の非宗教的社会状況においては継承が困難であり、消滅へと向かうであろう。日本人は、科学主義・物質主義



NII-Electronic Library Service

Japanese Association for Religious Studies



的生き方の問題性に気づき、真の宗教性を求めるべき時を迎えていると言えよう。

## アメリカの宗教事情と日本人の宗教性

那須　英勝

日本社会は「非宗教的」で日本人は「無宗教」だと説くようになって久しいが、海外、特に米国の日本宗教研究者は、日本社会は中世以来「世俗的な宗教社会」であり、現代の日本人は自己に対しても他者に対しても、非常に寛容で多元的な宗教観を持っていると評価することが多い。（Ian Reader and George Tanabe, *Practically Religious* [1998]; George Tanabe, ed., *Religions of Japan in Practice* [1999] 等）。日本宗教に対するこのような評価の違いが生じる背景には、まず、米国の日本宗教研究者は、特定の宗教的信仰に従って生活することだけでなく、世俗的な環境の中で宗教儀礼を行うことや宗教関連施設へ参拝することも、特定の宗教に対する信仰を持つことを表明することと同様に重要な宗教的行為であると考える点があるだろう。例えば日本を訪れる米国の宗教研究者から「イスラム教徒の年間のメッカの巡礼者数（二五〇万人）よりも、伏見稲荷の初詣者数（二七〇万人）のほうが多いという数字を日本の宗教批評家は過小評価しているのではないか」という意見を聞かれるのは私だけではないだろう。しかし米国の宗教研究者たちが驚くのは、初詣などの宗教行事において、米国人の常識を遥かに超える数の人間（しかも、その大半が自分を「無宗教」だと考えている）が、非常に狭いエリアに建てられた宗教施設にトラブルもなく整然と参拝できるのはどうしてなのかということである。

日本人の道徳性・宗教性について、米国のメディアは、東日本大震災直後に、米国社会では考えられない秩序ある行動をしたことについて、様々な報道がなされたことは記憶に新しいが、その中でも、宗教研究者の視点からは、震災発生一週間後（三月一七・一八日）に、米国の公共放送（NPR[ラジオ]とPBS[テレビ]）に、ダンカン・ウィリアムス氏（南カリフォルニア大）、ジョン・ネルソン氏（サンフランシスコ大）、ジェフリー・リッチー氏（ベレアカレッジ）の三氏に、震災と日本人の宗教観についてのコメントを求められたものがあり大変興味深い。三氏はいずれも、日本は概ね世俗的な社会であるが、非常の事態に直面した時には、その身についた宗教性が自然に現れてくるという。しかしそれは米国人が考えるような、特定の宗教的教義にもとづいて苦難の原因を宗教的に理解し、自己の強い信仰によって乗り越えようとするものではない。被災地において、倒壊した建物に無言で合掌し頭を下げる人々の姿にこそ、日本人の深い宗教的内省心が表現されており、またそのような日本人の宗教性を、社会的に最もよく示すものは「家族」や「地域共同体」の構成員による「宗教儀礼」の中にあり、コミュニティーの中で粛々と執り行われる「宗教儀礼」にこそ、日本人の宗教観が示されている。また、震災のような非常の事態に直面した時にでも、秩序ある行動を可能にした日本人の道徳性・宗教性の背景には、普段から様々な宗教行事に参加する際にすでに培われているのだろうと分析しているところである。



NII-Electronic Library Service